

## 差別・偏見を考える

北 裕弥

差別・偏見はどのように生まれるのでしょうか。発生から今年で50年になる現在でも差別・偏見によって自らが新潟水俣病の患者であると言いだせない人がいることを知っていましたでしょうか。

4大公害として知られている新潟水俣病は50年近く経った今でも、たくさんの問題が残されています。ただの歴史の一片ではありません。現在でも終わっていない公害問題であり、環境問題なのです。

我々は今回、新潟水俣病の「語り部」をされている5名の方々のお話を伺いました。お話を伺った方々はどなたも見ただけにはとても元気なように見え、新潟水俣病の症状がある患者さんとはわかりません。症状が見ただけにはわからないため、お金が目当ての「ニセ患者」など、さまざまな差別・偏見を受けたといいます。また、間違った情報によって水俣病は伝染病やタタリであると言われ、就職や家族の結婚などにも悪影響を与えたため、自分が水俣病であると言い出すことが大変難しい状況もありました。

自分が新潟水俣病だということを隠し続けている人が、まだまだいらっしゃる。それが、4大公害病のひとつとして教科書に載っている「新潟水俣病」の現在なのです。

差別・偏見はどのように生まれるのでしょうか。

今回の語り部さんへのヒアリング調査を通して、無理解、知らないままでいることが、差別を生む一因ではないかと強く感じました。目に見える情報、人から聞いた情報だけで物事を判断してしまうことは、自らが意図していなくても差別を生んでしまうかもしれないと危うさを孕んでいるのです。

問題の当事者に接し、話を聞き、考える、理解すること、それが意図せずして差別・偏見を生む自分自身を拒絶することではないかと思うのです。